

▼ 奪い合えば足らぬ、分け合えば余る ▼

校長 阿南 孝也

東京駅の近くに「相田みつを美術館」があります。書の詩人、あるいはいのちの詩人と呼ばれている「相田みつを」の作品に出会うことができます。

「うばい合えば足らぬ わけ合えばあまる」

「しあわせは いつもじぶんのこころがきめる」

心にしみる、そして耳の痛い言葉です。相田みつをの言葉に触れて、「地獄と極楽」のたとえ話を思い出しました。

地獄も極楽も、環境は全く同じなのだそうです。真ん中にごちそうがたくさんあって、1メートルはある長い箸が置いてあるのです。地獄では、各々が我先に食べようとするのですが、箸が長すぎて食べ物が口に入らない。争いが絶えず、皆やせ細っているのです。一方極楽では、長い箸でつかんだ食べ物を向かいの人に「どうぞ」と差し上げる。お互いに助け合うことで、皆でにこやかに食事ができるというのです。同じ境遇にあっても、私たち人間の心がけ次第で、地獄にも極楽にもできるというお話なのです。

主の祈りは、イエスが教えてくださった大切な祈りです。主の祈りの中で「私たちの日ごとの糧を、今日もお与えください」と祈ります。「日ごとの糧」とは、文字通り「その日一日分の食べ物」のことです。イエスの時代、聖書に精通していたユダヤ人は、イエスのこの言葉を聞いて、「貧しくもせず、金持ちにもせず、私のために定められたパンで私を養ってください」（箴言30章8節）を思い浮かべたことでしょう。

イエスの周りには、その日の食べ物にこと欠く人が大勢集まっていました。ヘロデ王とローマ帝国から二重の搾取を受け、重税にあえぐ人々が、食べ物を口にできるだろうか、糧を得る仕事に就くことができるだろうかという不安の中で唱えられた祈りなのです。

世界人口の20%に当たる日本を含む先進国が、全エネルギーの60%を消費しているのだそうです。日本人1人と発展途上国の4人がいて、パンが5つあるとすると、日本人が3つを食べて、残りを途上国の4人で分け合っている現状なのです。

洛星で学ぶ生徒たちが、「私の日ごとの糧」ではなく「私たちの日ごとの糧」が与えられるように祈りなさいと命じられたイエスの言葉を実現する人となってくれることを願ってやみません。日々の学びを通して視野を広げ、高い志を持った青年として成長してくれることを心から期待しています。

洛星の生徒たちは、協力し合って素晴らしい文化祭、体育祭を作り上げてくれました。校長として、生徒たちを誇らしく思いました。前期末考査でも、培った力を発揮してくれることを信じています。

「人生において最も大切な時 それは いつでもいまです」 相田みつを